

## スリランカとパキスタン——平和で安全な国づくり

ムハマット・サイド・アフマット・  
チョードリー、タヌチャ・クマリ・バ  
ンダール・ウエラカットウ・ムデイヤ  
ンセラゲ  
(執筆 今千春)

■ 講演者……ムハマット・サイド・アフマット・  
チョードリー(パキスタン経済問題省、アジア経済  
研究所研修生)、タヌチャ・クマリ・バンダール・  
ウエラカットウ・ムデイヤンセラゲ(スリランカ投  
資委員会、アジア経済研究所研修生)

貴、廣田亮介、九嶋亨、坂巻亜依、岩井良晃(以上、  
本学英米語学科通訳・翻訳課程学生)

■ 司 会……山形辰史(アジア経済研究所開発スクー  
ル事務局長・教授)

本レクチャーは、昨年度に引き続き日本貿易振興機構(ジェ  
トロ)アジア経済研究所より司会および講師を迎え、南アジ  
アの国についてお話しいただいた。本学とアジア研究所とは

■ 進 行……矢頭典枝

昨年度より提携を結び、互恵的な関係の構築を目指している。  
本学では南アジアの国々を対象としたコースは設置されてお  
らず、これらの国について学ぶ機会は限られていた。そこで、

■ 使用言語……英語

南アジアへの理解を深めるため、昨年度はブータンおよびネ  
パールから同研究所の研修生として来日している二名を講師

■ 同時通訳指揮……曾根和子(本学英米語学科特任講  
師)

にむかえてそれぞれの国について話していただいた。今年度

■ 同時通訳……平井祐未、櫛島愛美、林美波、伊藤大



講師陣と同時通訳用機器の説明をする曾根先生、進行の矢頭先生



司会の山形辰史先生

はパキスタンとスリランカからの研修生に講演いただいたものである。

レクチャーに入る前に、本レクチャーの同時通訳を担当する英米語学科通訳・翻訳過程の曾根和子特任講師および学生八名の紹介があった。

まず、今回の司会をつとめる山形辰史氏からアジア研究所についての説明と本レクチャーの講師二名が紹介された。同

研究所は本学より歩いて一〇分ほどの非常に近い場所にある。研究所の発足は一九六〇年で、一九九九年より現在の千葉市美浜区に移転した。また、一九九〇年に開発専門家の育成を目的とした開発スクールを開講し、日本人研修生に加え、開発途上国で政府の行政官として勤務している人々を外国人研修生として受け入れ、六ヶ月間の研修コースを提供している。今回の講師二名はこの外国人研修生として来日している人で

ある。講師の一人は、パキスタン出身のムハマット・サイード・アフマット・チョードリー氏である。彼はパキスタンの経済問題省で勤務にあたっている。もう一人はスリランカ出身のタヌチャ・クマリ・バンダール・ウエラカトゥ・ムディヤンセラゲ氏で、国では投資を中心とした仕事をしており、日本への投資も行っている。

## パキスタン

講演はまずパキスタンについて行われた。講演の前半ではパキスタンの基本的な情報、後半ではパキスタンの安全保障と日本との関係について紹介された。

基本的な情報では、歴史、地理的特徴、経済、文化と言語スポーツについて写真とともに説明された。パキスタンの歴史は、南アジアの地域の国々と共有されている。古くはハラツパやモヘンジョダロといったインダス文明が栄えたが、非インド系の文明に滅ぼされた。その後、アーリア人の移住などがあったが、とくに紀元前五〇〇年の仏教の流入、一一九二年以来のムスリム系文明の流入が大きな影響を及ぼすことになった。一七〇〇年のムスリム系文明のGDPは世界の二四%を占め、中東から南アジアにかけて最大の勢力となっていた。その後、一八五七年から一九四七年までのイギリスによる支配を経て、第二次世界大戦後、同国より独立を果たし

た。この独立時にインドとパキスタンとが分裂したが、その際パキスタンは、現在のバングラデッシュである東パキスタンと西パキスタンとに分かれたまま一つの国となった。ここで、ムハンマド・アリーがイギリス領インドにいたムスリムを集めて建国したのがパキスタンである。その後、政治的な理由により、一九七一年に東パキスタンがバングラデッシュとして独立し、現在にいたる。現在のパキスタンは、地理的には南アジアに位置しており、南部は中東の石油産出国、北部は中国の西部と隣接している。また、パキスタンの特徴としては、世界第二の高峰K2をはじめとした多くの山々、世界で六番目の人口、最大都市はカラチで世界第三の都市となっていること、世界第五の軍事力を有していることなどが挙げられる。さらに使用言語に関しては、国語はウルドゥ語で、世界第三の言語となっている一方、公用語は英語であり、英語を話す国としては世界で九番目となっている。また、首都はイスラマバードであるが、これは一九六〇年につくられた近代的な都市で、人口約一〇〇万人の大都市となっている。イスラマバードは春、夏、雨期、秋、冬という五つの季節があり、年間降水量は東京よりやや多い。経済に関しては、PPPでみると世界で二七番目、GDPでみると四七番目にあたると、主な産業はサービス業、工業、農業で、近年は五%のGDP成長率を保ちながら成長を続けている。中でも農業が

雇用の約五割を生み出しており、農業における生産量は世界で八番目となっている。文化と言語については、その多様性が特徴としてあげられる。パキスタンにはさまざまな民族や部族が暮らしており、その大部分はムスリムである。言語に関しては、九つの主要言語と七〇の少数言語が存在する。言語を含め、生活、服装、食事など、それぞれの民族や部族は独特の文化をもっている。スポーツは、ホッケーが国技とされており、ほかにはクリケットやスカッシュも盛んである。観光に関しては、歴史的にゆかりのある建築物や施設が主である。インダス文明やムスリムの建築物、イギリス式の大学や建物、鉄道などバラエティに富んでいる。一方、多くの山や滝など自然も豊富で、これらもまた観光資源になっている。

次に、パキスタンの安全保障について近年の傾向が説明された。パキスタンにおける対外的な平和、安全、保障に関する考え方はこの二〇年で劇的に変化している。とくに冷戦終結や9・11以降、この変化は顕著となった。一九九四年、元パキスタン大蔵大臣、当時UNDP（国連開発計画）の総裁特別顧問であったマブール・ハック博士は『人間開発報告書』の中で、「人間の安全保障」について提言を行っている。これは、国会の安全保障ではまかなえない個々の人々に対する保障を国連としていかにして実現するかを規定したもので、七つの分野に内容が示された。それは、経済の保障、食の保障、



講演するチョードリー氏(右)と、タヌチャ氏(左)

健康の保障、環境の保障、個人の保障、コミュニティの保障、政治の保障である。経済の保障では、貧困や失業問題など、食の保障では飢餓や食料不足など、健康の保障では環境やライフスタイルに起因する健康問題などを扱う。環境の保障は天災が取り上げられるもので、とくにパキスタンの場合は地震が多く発生するため重視される。さらに、個人の保障では戦争や民族紛争、犯罪など、コミュニティの保障では、民族内、民族間、部族間での問題が扱われる。政治の保障では基

本的な人権を保障する社会を目指したものである。

最後に、パキスタンと日本の関係について歴史的な観点から述べられた。まずパキスタンと世界との関係をみると、紀元前までさかのぼる。とくに仏教的な文明があった時代、紀元前七〇〇年ごろ世界で最初の大学が現在のパキスタンにつくられると、世界中から人々が集まり、さまざまな分野について学ぶようになった。日本との関係に目を向けると、一九〇八年に東京でウルドゥ語教育が始まり、一九二五年には東京外国語大学の浦生礼一教授が日本初のウルドゥ語教員となった。その後、一九三〇年には東京大学および拓殖大学においてウルドゥ語専攻が創設された。独立後に関しては、一九五一年のサンフランシスコ平和会議にパキスタンが南アジア地域から唯一参加しており、そこでパキスタン大使は「日本は平和を愛す国々にとつて、また世界の平和において将来重要な役割を担う国」であるとスピーチしている。そしてパキスタンは、一九五二年、同会議の直後に日本と国交を結んだ数少ない国の一つとなった。それから現在まで、JICA（国際協力機構）による人間の保障、経済発展、また国境地域の均衡ある発展のための活動もさかんに行われている。

## スリランカ

パキスタンに続いて、スリランカについての講演があった。

ここでもパキスタン同様、スリランカの歴史や文化な国の基本情報があり、その後、平和と安全保障について説明がなされた。

スリランカはインド洋にある小さな島で、他の国には面していないが、インドと非常に近いところにある。スリランカは、「インドの涙」、「インド洋の真珠」、「笑顔の国」などの呼び名があり、国旗には王を意味するライオンが描かれている。スリランカの歴史は約三万年前に始まり、三〇〇〇年の歴史が記録として残っている。それによると、一五〇五年まではスリランカ王に統治された時代で、その後一九四八年までポルトガル、オランダ、そしてイギリスよつて統治された。イギリスの支配下では「セイロン」と呼ばれていた。そして一九四八年には「セイロン」として独立、一九七二年に現在のスリランカとなった。また、一九八三年から二〇〇九年までは内戦状態にあった。スリランカの地理的特徴に関していうと、現在の行政的な首都はスリジャヤワルデナプラコッテ、商業都市として知られているのはコロンボである。気候は常に夏で季節の区別がなく、地域差も少ない。雨が多く自然が豊かであり、二五〇〇メートルほどの山が島の中央にある。人口は約二〇〇〇万人で世界五七番目の数となっており、シンハラ人（七五％）、タミル人（一五％）、ムーア人（九％）という主に三つの民族がいる。公用語はシンハラ語とタミルで

あり、これらの言語と英語は国語にもなっている。宗教については、スリランカは主に仏教国で、ガラダー・マリーガーワ寺院には釈迦の歯がおさめられており、「Temple of tooth」と呼ばれている。文化やスポーツに関しては、代表的な祭りとして、仏教とヒンドゥー教の新年祭が開かれること、クリケットや国技のバレーボールが盛んであることなどが特徴として挙げられる。経済については、内戦終了後、急速に成長を続けており、現在の主な産業としては、観光（遺跡やリゾート）、お茶の輸出（セイロン茶）、衣料、そして米などの農業が行われているという。

次に、スリランカの平和と安全保障を取り上げるにあたり、まずスリランカ内戦について語られた。スリランカ内戦は、一九八三年七月二三日に始まった政府とLTTE (Liberation Tigers of Tamil Eelam: タミル・イーラム解放のトラ) による内戦である。内戦開始前にもタミル人によるシンハラ人やムスリムに対する暴動や英語公用語化に対する反発、ジャフナ図書館への放火など、引き金になるさまざまな出来事があった。一九八七年のインドからの平和維持軍派遣、二〇〇二年の和平交渉による停戦もあったが、内戦状態は続き、一般市民への虐殺やタミル人であった外務大臣の暗殺などもあった。その後、二〇〇九年五月十九日に内戦が締結、テロリズムから解放されることになった。内戦後には、三〇万人

におよぶ国内避難民の帰郷と再定住化、インフラ整備、元LTTEの社会復帰などが進められた。とくに避難民に対しては政府の主導による支援、加えてボランティアによる健康や食事、教育などの支援も行われている。また、避難民の再定住化のため、LTTEによって地雷の撤去作業も行われた。これらの政策は、和解 (Reconciliation) 、社会復帰・復興 (Rehabilitation) 、最定住 (Resettlement) という3Rとして進められている。一方、経済面においては、内戦後五つの分野における経済政策を実施し、経済成長を遂げている。これはSHUsとされ、海運産業、空運業、商業、教育、エネルギーの各分野が含まれる。これらの政策により、スリランカは成長を続けており、二〇一三年にはUNDP (国連開発計画) の報告で初めて「High human development」のランクに位置づけられた。

最後に、スリランカと日本との関係を取り上げ、日本がスリランカにとって主要な成長パートナーの一つとなっていることが紹介された。JICAやJETRO (日本貿易振興機構) などの取り組みによって、日本はスリランカの経済成長、貧困撲滅、北東地域の生活向上において大きな力になっている。

以上三名による講演が終了し、質疑応答の時間が設けられ、活発な議論が行われた。

まずパキスタンに関する質問として、ストリートチルドレンと地震が取り上げられた。ストリートチルドレンについては、経済成長によって減少傾向にあるが、スリランカ同様、貧困層に存在している。政府はこうしたストリートチルドレンや孤児に対して援助を行い、さまざまな政策を行っており、努力を続けているところだという。地震については、現在はまだシステムは整っていない状況であり、正しい知識を身につけることが重要であるとの回答であった。

スリランカに関する質問としては二つ挙げた。一つはストリートチルドレンの現状について、もう一つはオンリー・シンハラ政策についてであった。ストリートチルドレンは確かに多いが、現在は政府の援助によって減少してきているという。オンリー・シンハラ政策は、もともとシンハラ人がスリランカの多数派であったためにシンハラ人を優遇する政策がとられたもので、これが内戦の要因の一つになってしまったとの回答がなされた。

さらに、パキスタンおよびスリランカ両国に対する質問が二つ挙げた。一つは平和についてであった。これに対し、チョードリー氏は、平和とは戦争がないことの他にも、身体的あるいは精神的に束縛されないこと、経済的に縛られないこと、自分らしく生きることなど多くの意味合いがあることを指摘した。一方、タヌチャ氏は、世界中の人々が心から笑

顔になれることが平和だという考えを示した。もう一つの質問は、少数言語の消滅についてであった。これに関してはパキスタンとスリランカで回答が異なっていた。パキスタンは新しい世代の少数言語話者が自分たちの言語の使用を回避する傾向にあり、少数言語消滅への危機感が述べられた。これに対しスリランカでは、多数派の人でも少数言語を話すことが多いため、大きな問題にはなっていないとのことであった。



同時通訳を務めてくれた本学通訳・翻訳課程の皆さん